一生なくさないでほしいもの

花岡 千春 先生

花岡 千春（はなおか ちはる）

東京藝術大学卒業、同大学院器楽科ピアノ専攻修了。故・安川加壽子女史に師事。その後、パリ・エコール・ノルマル音楽院に留学、審査員全員一致の第一等首席を取得卒業。ヨーロッパ各地で演奏。イタリアのパルマに居を移し、古典および近・現代フランス、イタリア音楽の研鑽を積んだ。フィナレ・リグレ、マリオ・ザンフィ・リストなどの国際ピアノコンクールに上位入賞。帰国後はソロリサイタルをはじめ、室内楽や伴奏、放送等で活躍。1999年開催の独奏会で第54回文化庁芸術祭音楽部門大賞を受賞。現在、国立音楽大学教授。

余りに美しい声が事務室に響くので伸び上がってみると、花岡先生でした。その美声に酔いながらのインタビュー。中身が濃いのは勿論のことです。

ヴァイオリンは苦手？

―音楽を始められたきっかけは？

花岡　妹がピアノを始めたら、息子はヴァイオリン、と父が決めていたみたいなのです。僕は最初からピアノをやりたかったのですが、ピアノは女性の楽器と父は思っていたようです。幼稚園から才能教育の鈴木鎮一先生その人からヴァイオリンを教わっていたのですが、実は、イヤでイヤで（笑）。専ら伴奏ピアノに熱い視線を送っていたそうです。結局自然に弾けるようになっちゃって、母が父に内緒で始めさせてくれました。

―ピアノはずっと順調に？

花岡　父はどちらかというと、やめさせたかったようです。父は文学系に進みたかったのに諦めて家を継ぎ商売をしていましたから、僕には文学部とかに行ってほしかったのではと思います。家にはバルザックとか山崎豊子とか、全然子供向きでない本がたくさんあって、それを内緒で読んでいました。

そういえば、商売をやっている我が家では、人が働いている時、知らん顔しているのはよくないと何かにつけ手伝わされました。ピアノを弾いていても勿論呼ばれました。今でも学生や裏方さんがステージで椅子を並べたりしていると、黙って見ていることができないのは、父の躾でしょうね、これだけは感謝しています。

その時、何かが吹っ切れた

―印象的だった先生は？

花岡　自分にとって最大の先生は安川加壽子先生です。フランス仕込みの合理主義的な大人であり、非常に真面目でいらした。大変尊敬し、憧れてもいました。

実は、大学2年の時に父が亡くなり、母の手伝いをしたりで、一

ヶ月ほどピアノの勉強が全くできなかったんです。その時、事情をご存知なのにレッスンでものすごく怒られました。何故こんなに、と思ったのですけど、「励まし、期待して下さっているんだ」と気づき、涙が出るくらい嬉しかったです。その時、何かが吹っ切れたと思いました。

―レッスンの曲は、全然疑問もなくという感じでしょうか？

花岡　多少はありましたけど…。フランス物はほとんど下さいませんでした。ベートーヴェンのソナタ、あとブラームス、シューマン…。大学院に入ってから、ようやくフランス物を少し。「先生、どうしてフランス物は下さらなかったのでしょうか」と訊くと、「あなた、好きでしょ」と（笑）。

―伴奏とかは、いかがでした？

花岡　畑中良輔先生のレッスンに伺ったのが始まりです。当時は、綺羅星のように素晴らしい先生が芸大にいらして。

―歌手にも伴奏者にも厳しい先生がいらしたとか。

花岡　もう、楽譜は飛ぶし、歌い手がよけても怒るのです。「どうしてよけた！」って。僕は飛ばされたことないですけどね（笑）。

―見込まれたのでしょうか？

花岡　いや、ピアノが傷つく、と思われたのではないですか。

フランスの誇り高き八百屋さん

―留学のきっかけは？

花岡　大学を出て、困った！やることがない。何も考えていなかった！「じゃ、もうちょっと勉強を続けてみよう」と先生にお話したら、「なら、行ってみる？」ということでフランスへ行ったわけです。

―やはり弾きたい曲があったからでしょうか？

花岡　勿論音楽が好きだったということもありますけど、フランス芸術に対する傾倒が大きかったです。

―安川先生のレッスンとつながるものも？

花岡　先生はほとんど何もおっしゃらないんです。うまくいったら「うん」だし、よくないと、「うーん」で。それだけなのです。

―あまりテクニックはおっしゃらないということでしょうか？

花岡　時々おっしゃいますが、細かいことはおっしゃらないです。

―フランスの先生方も？

花岡　おっしゃらないですね。作品についても、メソッドについても自分なりに考えていかなきゃいけないということです。

―言葉のご苦労は？

花岡　あまりなかったですね。言葉がしゃべれなくても何とかなるし、勉強していれば段々覚えていきますものね。アパートのそばにちっちゃな八百屋さんがあって、そこは、指さしただけでは、売ってくれないのです。「ちゃんと口で言いなさい」と。通じると取ってくれて、通じないと取ってくれない。簡単な発音でも、中々通じなかった。4週間くらいたった時、「お前の発音が全部わかる！」と拍手してくれて、握手してもらった。それはすごく幸せでした。

―海外のコンクール事情を伺いたいのですが。

花岡　はじめ、毎回違うプログラムを用意していたのですから、お間抜けですよね。あるプログラムを作っておけば、どこでも受けられると段々わかってきました。どこへ行っても必ず会う人たちがいて、同じものを弾いている。こうやって鍛えていくということが、わかってきたのです。

―コンクールの功罪は？

花岡　多くなり過ぎたとは思いますが…。コンクールは落ちてもいいんです。落ちてなにくそと思えばいいわけで。大体コンクールの審査が絶対なんていうことはないのです。審査に曇りが出ることはあるし。

昔は世に出るためにコンクール通過が必要だったのですが、この頃はむしろコンクールを受けなくても、特殊なレパートリーとか、活動をしているということで、認められる場合もありますよね。

演奏家冥利（苦しみ、楽しみ）

―先生の演奏会やCDは、〝楽しい〟と評判なのですが、意識されてのことでしょうか？

花岡　全然していません。けれども、みんなは楽しそうに弾いていると…。僕は苦しいんですけどね（笑）。ああ、こうなっちゃった、ああなっちゃったと、後悔と反省ばっかり。

―先生のCDの中では、うたと共演の『東京行進曲』（請求番号●XD38209）が大好きなのですけど、これらの歌のバンド伴奏を全部ご存じなわけではないと思うのですが。

花岡　いや、知ってます。勿論！それから楽譜を起こしているのですから。昔から、オペラのアリアの伴奏でも、自分なりのヴァージョンを作るようにしていました。

―音を正確に表すための色々な準備も、〝楽しい〟みたいな。

花岡　勿論そうです。そうでないと気持が悪い。

ただ楽譜通り音を並べるよりも、何故その音があるか？この音

当館所蔵CDより。左から『花林/雨の道　橋本國彦、信時潔、畑中良輔ピアノ作品集(請求記号●XD59111)』『子供のために　花岡千春タンスマンを弾く(請求記号●XD57849)』『木の葉集　信時潔ピアノ曲全集(請求記号●XD56710)』『東京行進曲　日本の歌謡(本文参照)』

はどういう楽器が演奏していたか?を知ることが、最低限の務めだと思います。あるいは、この時代の作品には和声的に妙な響きのところがあったりもします。それを今の僕らの常識で安易に変えてしまうのも考え物だと思っています。柔軟に変えられるピアノ以外の伴奏ものは、やはり作品の原型の追求が欠かせないと思います。

戦前には、素晴らしい歌がたくさんあります。ですが、オリジナルの歌手の魅力と分かち難い歌謡曲を芸術歌曲のような一つの価値にまで持ち上げるというか、そういう市民権を得られるところまで知らしめ認めて貰うということ、それは恐ろしく難しいことです。しかし、このCDの準備は少なくとも楽しい作業だったんですよ。

ークラシックではいかがでしょう?規範には従っておこうとか。

花岡　ああ、僕はそういうタイプですね。反逆するほうではないです。やはり規範とか伝統には寄り添うタイプだと思います。それがクラシックだと思いますし、継承していかなきゃいけないものは幾らでもあります。

最終的にどこに行き着けるか

ー暗譜のコツとかありますか?

花岡　ありません。教えてください(笑)。とにかく頭を使い、和音の変化、調性、展開等、構造的に覚えるようにしています。昔は指だけであっという間に覚えられましたが、今はそれでは怖い。頭をフルに使って暗譜しています。

ーあがりますか?

花岡　あがるんでしょうけど、昔程は意識しなくなりました。

ステージに出る前は嫌ですよ。以前は、出てからも嫌でしたが、この頃は出ていったら、もうしょうがないなとすーっと落ち着いて。やはり経験でしょうね。本番でうまくいかないものは普段だってうまくいっていないんですよね。

あと、暗譜だけに関していえば、とにかく十代でやったものは、よく覚えています。三十過ぎてからは、さっきやったのにもう忘れている(笑)。やはり十代二十代で色々な曲を知っておくのは、大事なことです。

ーCDの功罪については、どうお考えでしょうか?

花岡　難しいですね。CDも利用の仕方だと思います。CDを聴くと模倣になるという人もいるけれど、模倣をすることだって大変なことです。どの程度の模倣ができるかとか。CDを聴くことは、むしろ推奨します。

ただ、「一種類の演奏に拘泥するのはよくない。それは非常に危険!三つ四つのものを聴くこと。あるいは聴く時期を考えること。例えばある程度練習した後に!」とは言っています。やはり利用の仕方というのは考えなきゃいけない。最終的にどこに行き着けるかが問題です。それぞれの方法論を見つけていけばいいのではないでしょうか。

僕の役目

ー日本人作品に取り組まれたきっかけについてお伺いしたいのですが。

花岡　そもそものきっかけは、指を痛めたことです。それまでのレパートリーを使うことができなくなり…。さあ、どうしよう。何かできるものはないかと思って…。恥ずかしながら、それがきっかけです。高邁な思想なんて無かった。

実は、学生時代から橋本國彦や、信時潔の歌曲は盛んにやっていました。それと考えてみると、子供の時から邦人作品の新しい楽譜が出ると、それを買って弾くことも妙に好きだったんです。どんな音がするんだろうって。弾いてみると、不思議な音がして…。長じてからは、自分がクラシック音楽、要するに自国のものではないものばかりをやっている。そういうところから、「じゃ、日本人が書いた音はどんなものだろう?」というところに、体の不如意の時にもう一度立ち戻ったのかもしれません。それと歴史の裏側にある、何で取りあげられないんだろうというような作品を演奏したいという気持ちはいつもあります。

そりゃショパンやシューマンばっかり弾いていたら勉強になりますし面白いんですけど、この世で僕の役目は別のところにある、みたいに思うんです。実は、僕は目立つ学生より、素質がありながら中々認められない学生のほうが気

になって仕方ない。だから、そういう性分なんですね。不器用でも、勤勉で真摯な学生が気になるのは言うまでもありません。同じ様に、質が高いのに認められていない作品に対しても、できることなら、外に出したいという気持で一杯です。

―今後のご計画は？

花岡　年末に邦人のピアノ作品全集を1枚録ることになっています。その後3月にフランス近代の1枚。もう、3枚先のCDまで予定が決まってるんですけど、一体僕はいつまで生きていられるかわからないし（笑）。

「歌曲作品研究」のひろがり

花岡　たまたま「歌曲作品研究」という授業をやらせて頂いて、日本歌曲を年代順にやっているのですけど、例えば日本人は〝雪〟を見た時に、ただ白いだけではないものを感じますよね。蒼ざめた感じとか、暗闇に光る感じとか、そういうものが僕らの感覚の中には、もう根源的にあるんですね。

ある言葉と向き合った時に、自分がそれに対して何を感じ、どう表現するか。その言葉との対峙の仕方は、実は同様に全ての音楽で応用されなければならない。ドイツやフランスの芸術歌曲に対峙する志も、勿論そんな覚悟の上になければならないと伝えたいのです。

―ピアノの学生にとっても？

花岡　外国曲の場合、辞書を引いて一生懸命意味を探って、しかし残念ながら大半はそこでおしまい！それでは不十分だということを、日本の歌曲をやりながら勉強してほしい。先程の〝雪〟という言葉の例のようなことを、母国語で体験すると、一つの言葉にこんなにもイメージがあることがわかる。その恐ろしさ、奥深さを知ってほしい。

ピアノのアンサンブルコースの学生もこの授業にいるのですが、彼女たちが日本の歌曲の伴奏をやると、言葉の扱いや曲全体の雰囲気の表出に敏感になっていく。時にはピアニストのほうが歌い手より優れたイメージを持って演奏する場合もあるのです。結局、歌手とピアニスト、二人の共同作業、両方の共同責任で芸術ができていくわけです。学生たちが喜んでやってくれるので幸せだと思っています。

今、出す音に責任を

―改めて学生にアドヴァイスを

花岡　芸術家としての成熟とは何か、もう一度考えてほしいです。

国立音楽大学には、この世の中の良心の部分を担っていく人たち、そういう善良な人たちが集まっていると実感しています。しかし、そういう人たちだからこそ世俗的な大成功は望めない場合もあるかと思います。でも、音楽には色々な成功の道があるのです。自分を見極め、一体どういう形が自分にとっての成功かを考えることが必要だと思います。今皆さんが持っている良心とか、優しさとか、思いやりとか、そういうものは一生なくさないでほしいですね。

名だたる国際コンクールでも、今や、物理的な音の大きさや速さあるいはミスの有無だけを判定の基準にはしていない。それだけを第一義とする勉強よりも、その後ろにあるもの、芸術性というか思想というか、借り物でない歌心や色なりにこだわり続けてほしいと思います。そして、とにかく自分の出す音について、何故この音は今こういうふうに出すのか？説明できるくらいでないといけない。そういったことについて、責任を持てる様な勉強をしていってほしいと思います。

花岡先生おすすめの本

『ベンヤミン・コレクション1～4』（ちくま学芸文庫）
これは精読と言うより、時間がちょっとあるときにぱらっと開いて読みます。ぱらっと開くから、以前ぶつかったところに遭遇するときもありますが、それはそれ。面白いのです。2と4が特にお薦めかな。

『田中一村作品集』日本放送出版協会
一村は若冲にも近く、ルソーにも近く、とても面白い画家。絵は凄く好きですが、それも職人的な絵が好きです。日本画はこのごろ本当に好きになりました。あとはブリューゲル、フェルメール、カラヴァッジョなんかの画集をしつこく眺めるのも好きです。

『オリヴィエ少年の物語（ラバ通りの人々、3つのミント・キャンディー、ソーグのひと夏）』ロベール・サバティエ著 福音館書店
唯一の小説。これは子供用の本なんですが、なかなか面白い。邦訳はまだ完結していませんが、フランスのよき時代の話。ティボー家の物語とはまた別の味わいの、しかし細やかな心情描写のすぐれた作品だと思います。

■いずれも当館では未所蔵の資料です。TAC加盟館、公共図書館で利用して下さい。
■〝ティボー家の物語〟デュ＝ガール著。日本では〝チボー家の人々〟というタイトルで訳出（編註）

● いちかわ　としつぐ　優しさに満ちた数々のお話。泣く泣く字数を削りました。
でも、先生の新刊があります。踏み出す勇気の欲しい方。お薦めです！